

第117回 日文研フォーラム



石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について

On Translating Ishikawa Jun's *Legend of Gold & Other Stories*



ウィリアム J. タイラー

William J. TYLER

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公開を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 河合 隼雄

● テーマ ●

石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について

On Translating Ishikawa Jun's *Legend of Gold & Other Stories*

● 発表者 ●

ウィリアム J. タイラー
William J. Tyler

オハイオ州立大学助教授

Associate Professor, Ohio State University

国際日本文化研究センター客員助教授

Visiting Associate Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies



1999年4月13日(火)

発表者紹介

ウィリアム・ジェファーソン・タイラー

William Jefferson TYLER

米国 オハイオ州立大学東アジア科准教授

Associate Professor of Japanese Language & Literature

Ohio State University, Columbus, Ohio USA

国際日本文化研究センター客員助教授

Visiting Associate Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies

学 歴

1968年 6 月 国際基督教大学教養学士号取得

1971年 6 月 ハーバード大学東アジア科修士号取得

1981年 6 月 同大学同科博士号取得

職 歴

1976年 9 月 アーモスト大学講師

1979年 9 月 同大学助教授昇格

1981年 9 月 ペンシルバニア大学助教授

1987年 7 月 アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター所長

1990年 8 月 ハワイ州立大学客員准教授

1991年 9 月 オハイオ州立大学准教授（現在に至る）

主な著書・翻訳:

1976 *The Psychological World of Natsume Soseki*. Harvard University Press, 161 p.

1990 *The Bodhisattva*. Columbia University Press. 181 p.

1994 『本音と建前』－石川淳「マルスの歌」と太宰治『惜別』。早稲田大学出版『比較文学年誌』第30号 pp. 126-142.

1997 「有島武郎」丸善ブックス出版『世界が読む日本近代文学』第2巻 pp. 15-28.

1998 *The Legend of Gold and Other Stories*. University of Hawaii Press. 322 p.

1999 「文化翻訳者・製造者としての夏目漱石」丸善ブックス出版『世界が読む日本近代文学』第3巻 pp. 255-267.

ご紹介にあずかりましたタイラーです。本日、フォーラムの主催者国際日本文化研究センターを始め、国際交流基金京都支部、わざわざここへお集まりいただきました皆様にお礼を申し上げます。誠にありがとうございます。

私は日本近代・現代文学をオハイオ州立大学で教えております。一八七〇年に創立されましたオハイオ州立大学はアメリカの中西部 Midwest というところにある Columbus という町にあります。Columbus は大学町であり、州都でもあり、人口は百万人。地方都市としてこの三〇年間著しく延びてきて、近頃では、歴史的に知られる Cleveland や Cincinnati 市より人口が増加し、オハイオ州の一番大きい都市となりました。九年前に私も Columbus へ移り、それまで住んだり、教えたりした場所と違い、山も海もない平地ですが、その代りどんなに夜が暗くても常に「オハイオ」と言えるところなんです。(笑)。

Columbus にあるオハイオ州立大学の学生数は五万五千人くらいです。学習者の数では、アメリカで一、二を争う大きな大学です。大きさはともかくとして日本研究の面では、東アジア言語学・文学学科もあり、博士課程まで含むプログラムと

いう意味で、オハイオ州では日本研究に関して唯一の高等教育機関であります。

日本語教育又は日本研究がオハイオ州で盛んになったのは二五―三〇年前の事です。これはなぜかと言いますと、California州に次ぐぐらい、日本の企業が州に進出し、例えばColumbusの近くに本田技研工業のアメリカ本部があります。日本企業をアメリカへ誘致するその時代から日米相互理解を計るよう、州政府が熱心になり、日本語科、日本文学科、日本研究科を州立大学に設ける事にしました。そういった経緯があつて、今、学部生では、日本語の学習者、つまり日本語の一年から五年まで勉強している学生数は六〇〇人位います。それから日本語学習と別に、英語で行われている翻訳文学を通じての日本文化入門あるいは文学入門というクラスもあり、これ等のコースをとる学生が年間三〇〇〇人にのぼります。なぜこんなに多くなるかといいますと、およそ二〇年前から経済大国として日本が注目され、学生が日本文化について理解を深めたいという願望も湧いて来ましたし、それと同時にオハイオ州立大学ではアフリカ、南米、アジアという三つの領域に関するコースをひとつ選んで勉強することが必修科目になっており、異文化理解のためにアメリカ或いはヨーロッパ文化と違う国の教育が義務付けられて

いるからです。約三〇〇〇人が一年間にアジア研究、とりわけ日本研究を求めて勉強してくるのです。専攻や動機付けはそれぞれ違いますが、英語を通じて日本が紹介されているのが普通です。もちろん日本語を勉強している学生もいますが、日本語で書かれた文章や本が読めるようになるには年月がかかるもので、日本文学や文化の紹介に当たってはどうしても翻訳が中心になり、教育手段ともなる次第です。

学部生の育成とは別に、大学院のプログラムもあり、院生には日本語を母国語とする人もいれば、大学および大学院で日本語を学び、日本へ留学し、日本語を第二国語として身につけている者もあります。学部生の教育に比べプログラムの規模がうんと小さくなりますが、今現在私のところで勉強している修士課程、博士課程の院生は二〇人位います。

私自身も元々は日本へ留学して日本語を学んだもので、初めて日本へ留学にきたのは東京オリンピックの年でした。一九六四年でした。それは昭和三九年だと思いますが、その時より日本語への挑戦が始まり、その第一回の日本滞在は四年

間に亘りました。のちに日本に滞在したことも数回あり、短い旅もしばしばですが、昨年九月より生活の場として一〇年ぶり日本へ戻って、国際日本文化研究センターのおかげで、昭和十年代の散文学におけるモダニズムの研究をしており、目下その翻訳やアンソロジー作成に頑張っているところです。研究と同時に初めて関西に住むチャンスも得られました。今までの日本体験は東京、横浜、鎌倉に限ったもので、観光以外は関西を知りませんでした。社会勉強まで含む研究のため貴重な機会を与えてくださった日文研の河合所長はいうまでもなく、モダニズムの「超」専門家であり、直接私の研究を指導して、今日もお世話になる鈴木貞美先生に深く御礼申し上げます。

さて、自己紹介をこの程度に致しまして今日の話に移りたいのですが、のちに質疑応答の時間を設け、興味のある点について質問がありましたら、できるだけお答えします。

石川淳先生の名前と作品に初めて触れたのは三二年前の事、初めて日本に四年間留学して大学を卒業する年でした。当時は、社会心理学専攻で、まだ世の中に

広く知られていなかった土居健郎先生の「甘え理論」に興味を覚え、『甘え』の構造』という文化論をテーマにした卒論をまとめようとしていましたが、しかし以前から私の関心は文学の方にあり、大学紛争の激しかったその頃、学校閉鎖を渡りに舟、よく喫茶店に籠ってクラシック音楽を聞きながら、島崎藤村の『新生』を初め、夏目漱石の『それから』『心』等の小説を読みふけり、多くの時間を二十世紀日本文学の乱読に費やしました。その時からでもモダニズム作家の先駆者の一人である梶井基次郎の作品にも興味をいだき、寺町通りや京都の丸善さんを舞台にする『檸檬』という傑作が大好きで、「得体の知れない不吉な塊が始終私の心をおさえつけてきた、焦燥というか、嫌悪というか」と始まる、そして話の終わりに丸善で美術史の本を山に積み上げ、その頂きにレモンを載せるなんてその短い、奇怪な物語をとりあげて初めて日本文学作品の英訳をこころみました。一方、私の近代日本文学の乱読に実用面もあって、作品を読みながら文脈に表れる「甘え」の例文をあさり、卒業論文の趣旨を立証するため、わが読書三昧を生かし、役立てました。

今になって顧みますと、丁度、学問の上、心理分析的な方法論より架空の効用

を基本とする物語理論の方へ考えが次第に移行しつつあった時で、そこで石川先生が書く、心理を排除した純粹散文的な要素をふんだんに使って盛り上げた作品に出会ったのは、大變象徴的でもあり、意義深い転換でした。無論、当時はそういった方法意識は私の頭に毛頭なかったし、高尚な文学論を以て文学三昧をした訳でもありません。ただただ小説を何冊も読み上げて行くうちに、なにかの欠如を感じ、気がついてみたら、それは笑いがかけている、あるいはアイロニーとしてしかユーモアが生じて来ないという事でした。これは漠然とした印象から始まり、しかし次第に強く感じるようになりました。

ある日その欠如感を訴え、近代・現代日本文学に通じている竹村淳さんという友人に、何か笑わしてくれる小説はないかとたずねてみたところ、即座に石川先生の『白頭吟』という小説を紹介してくれました。そうしてこの小説を介して、石川淳という人間と文学への私の出発が始まりますが、おそらく多くの読者と同じように、先ず文体の巧みさ、話の展開の素早さ、そして言葉の綾に驚きました。が、なによりも小説の第一行より約束された「ひとが笑をこらへてゐるやう」な、時には爆笑にも至るその笑いの精神の晴々しさが私を引き付けてくれました。石

川淳の文学は楽しい発見でした。誰より早くという軽率な野心もありましたが、是非とも世界に紹介したいと思い立ったのです。

大学院に入学してそれを機会に専攻を文学に変え、石川淳を博士論文の研究対象にしました。一九七〇年頃石川淳という名前と作品はアメリカの日本文学者に知られていなく、日本でさえ井澤義雄先生、それに野口武彦先生の石川淳論二冊ぐらいでした。論文の topic としてあまりにも“recherche”と一部に言われましたし、日本でも石川淳を一種の「西洋かぶれ」や文学史で彼を「例外扱い」とする意見は当時の実状でした。過去一五年間モダニズムという便利な概念が日本文学、特に散文作品に対して適用されてきてからは事情がかなり変わりましたが、しかし今でも石川淳を特別視する考え方がある程度生きつづいているように思われます。実を言いますと、私も石川先生の作品を理解に至る、または先生が文学上なされた仕事を位置づけるにも相当苦勞をしましたが、一九八一年大学院に提出した博士論文にも書きましたように、この作家に関しての基本知識としては次の四ポイントが肝心でありましょう。一、石川淳は重要なモダニズム作家であること、二、彼は初期の実存主義者であること、三、戦争や権力へのレジスタンス姿勢を一貫

してとって来られ、芸術家の social critic としての役割を形創った近代小説家の一人であること、そうして、四、パロディー、アレゴリー、それに風刺というモダニズム文学の特徴である重層構造を築き書く優れた文章家であることです。

しかも石川淳は日本文学の上にも世界文学の上にも十二分位置づけられる作家であることも確信しております。つまり、日本文学においては、江戸天明期にさかのぼり、そして森鷗外や永井荷風によって近代文学に継がれてきた文人の伝統に彼はその現代の担い手の末端として立派に参加しています。それと同時に自然主義文学への厳しい批判や新興芸術派行動主義的姿勢においても石川は象徴主義や背徳を唱えてきた仏文学者アンドレ・ジイド等の二十世紀ヨーロッパ・モダニズム文学の流れも深く汲み取って来ました。故に、生前よくメディアでは「日本最後の文人」として紹介されたりしていましたし、或いは一九六〇年頃より一九八七年に亡くなる年まで書き続けられてきた『荒魂』『至福千年』や『狂風記』といった長編小説が近年世界文学の双璧 Nabokov と Borges の作品に勝るとも劣らぬ事も指摘されたりしています。石川淳の翻訳者である私ですが、こういった評価は決して誇張ではありません。

しかし、いくら石川淳の業績を吹聴しても作品そのものが外国人に読まれない、または読んで貰わない限り、作品の紹介が成り立たず、話が空転するばかりです。論文に次いで、一九三六年に書かれ、翌年芥川賞を受賞した『普賢』を *The Bodhisattva, or Samantabhadra* という題で最初の石川淳英訳として試みて、これは一九九〇年 Columbia 大学出版部より出版されました。しばしば難解と感じたこの小説を *palmpest* あるいは「二重写し」として理解に漕ぎ着けるまで、解釈と翻訳に苦しんでいる間、その作業を楽しく続けさせて支えとなってくれたのは、正に石川淳の小説の根底に流れる世の中に向かっての自由の笑いでした。おそらく若き日の石川淳がアンドレ・ジイドの小説『背徳者・*L'immoraliste*』と『法王庁の抜穴・*Les Coues du Vatican*』を二冊和訳した時の経験でもあったように、文学作品における作家のほほえみ、特に言葉の綾や行間からしか読み取れない眉唾の皮肉とその韜晦ぶりは、最も断定しにくい、又翻訳上伝えがたい表現の一つであります。しかしそれをつかまえて、その上に別の言語に移し替えるのは痛快なチャレンジです。のちにこのポイントに戻り、更に言及したいと思います。

石川先生ご自身に初めてお目にかかったのは一九七四年で、大学院論文取材のため、二度目の日本留学の時でした。慶応大学国文学の檜谷昭彦先生のお世話になり、音楽部竹田名誉教授を通じて連絡がとれたのです。いかにも石川先生らしく一切の面倒も媒介もなく、ただお宅へ電話するようにとの事で、その結果ホテル・オークラで二人で食事をとる事となりました。その日、約束の時間より早く行ってみましたら、先生がもう既に早く、バーにて片手を水割のグラスに休ませながら、吸いかけた一本のタバコを持ち上げ、全集の写真によく見られる姿と同様、ゆったりと、そして気高くおられました。その後、数回にわたり誘いがあって飲みに連れて行っていただいたり、文壇の方に紹介したりして下さいました。口数の少ない方で、その上「文学は話すもんじゃない」と常にお考えでした。時に会話が途切れがちになり、話の糸口を見出すのに一苦労だったりしましたが、しかし作品を作家の声で読むという意味で、しかも御本人の韜晦ぶりを理解する上、「生きている作家」への接触は大変参考になったのです。

さて、これから私の方の仕事、つまり石川淳の作品の翻訳へ話題を転じますと、その概論と実践について暫く考慮したいと思います。先に申しましたよう、一九

九〇年コロンビア大学出版部よりの *The Bodhisattva* がその一冊ですが、もう一冊は昨年暮ハワイ大学より出版された *The Legend of Gold and Other Stories* という本です。この「黄金傳説」その他の翻訳集は短編四つ、それに中編一つからなるもので、先ずは日本軍の中国への侵略が激しくなる一九三七年暮れに書かれ一九三八年『文学界』一月号に載って発禁処分を受けた「マルスの歌」から始まり、それから一九四五五年の「名月珠」、一九四六年の「黄金傳説」と「焼跡のイエス」、そして一九五三年に著作された『鷹』という中編でしめくくりをしています。この英訳二冊を合わせますと、石川先生が戦前、戦中、それに戦後初期にわたって書いたもっとも代表的作品を、海外、あるいは厳密に言えば、英語圏の読者に紹介できたと言えます。日本でよく知られているドナルド・キーン先生も石川先生が一九五九年にかいた『紫苑物語』を *Asters* というタイトルで早くも一九六一年に翻訳されていますが、残念なことに複雑な事情により本が絶版となり、入手困難です。またついでに付け加えますが、「黄金傳説」「焼跡のイエス」それに『鷹』の仏語訳もあり、『紫苑物語』はイタリア語及びロシア語の訳もあります。

文体の面では、『鷹』以前の作品はいずれも一九三〇年代世界的に流行った長文

で、句読点の少ないあるいは全くないいわゆる「饒舌体」で書かれている小説がある一方、『鷹』以降の作品は文章が短く、読者にとって比較的読みやすい読物になっていますし、翻訳者の仕事もいくらか楽になるのですが、それでも石川文学特有の持ち味が一貫しており、おそらく同時代の作者——たとえば今年生誕百年を同じく迎える一八九九年生まれの川端康成——の文体と比べて、翻訳の上、石川先生の方が手間がかかると言っても言い過ぎではありませんまい。現にアメリカの日本文学研究者Ted Fowler氏によれば、戦後もっと早い時点で若しも石川淳の作品が翻訳され外国に紹介されていたとすれば海外における近代日本文学の理解、またはそれに伴う東洋趣味的耽美を中心としがちな「聖典」づくりも今までと違った形を示したのではなからうかという意見です。

近頃アメリカの学会では翻訳理論やその仕事そのものまで再検討・再評価されて来て、特に *hermeneutics*・解釈学が重視されて以来、翻訳作業についての関心は高まりつつあります。解釈学は翻訳が単なる置き換え作業と見ないで読解力の真剣な問題と考え、数年前までアメリカ学界を風靡した、翻訳は学問に付随する二流作業という考え方と正反対で、翻訳の営みは却って作品のもっとも徹底した、

厳密な「読み」でもあると主張するところです。とりわけ解読困難な逆説、皮肉、冗談、意味合いの曖昧な或いは権力や検閲の前に屈してわざとぼかした表現に関する研究が重んじられて来ました。これは日本文学だけの問題ではなく、どこの国の文学にもありうる問題で、しかも文章のうまい、行間を書く作家がいれば、当然その理解と鑑賞のため目の肥えた読者もいなければなりません。翻訳はまさに謎の「手解き」のようなもので、高度な文芸作品こそそれだけの strategy が要求され、作家が口先と心底、表と裏、建前と本音を異にして書く場合は、翻訳者もその行間に読み取れる二重性、三重性をつかまえ、たとえ眉唾のジェスチャーでもそれを文字通りの「手掛かり」として読者に伝える必要にせまられています。

『普賢』と「黄金傳説」を訳するに当たり主に二つの strategy に頼ってみました。その一つは翻訳に解説をつける事、もう一つは翻訳の中で文章の tone に特別注意を払う事。

先を急ぎ『普賢』に関する細かい話を省略しますが、しかし一つだけ許せば、やはりこの小説が私の石川文学への接近方法の決め手となり、その模範でもあっ

たと言っても差し支えありません。それはなぜかと申しますと、タイトルは普賢菩薩の話ですが、この作品は決して仏教の小説ではなく、作者も小説の中でわざわざ人物を登場させ物語は決して仏教の利生記ではないとまで断っており、そのぐらい読者に注意をしています。そこで我々が気付く事は普賢菩薩は登場人物や仏の化身のどちらでもなく、一種の大なる比喩であり、おそらく一九三六年に日本のどこを見回しても救い主はないだろうとその無や不在を悟らせる石川淳の文学的「シカケ」です。大変複雑な構築で、戦火の燃え上がる十三世紀のフランス王国と二十世紀日本を平行させた上、普賢・文殊、寒山・拾得、さらに Christine de Pizan・Jeanne d'Arc といくつかの比喩的コンビが配置され、見立てられている設定ですので、予備知識がなければ、とうてい解読不可能に近いのではないでしょうか。外国の読者が面食らうのは当然のことで、解説は欠かせないものとなりました。従って、第一の翻訳 strategy として読後のため解説を加えることにしました。

今度の「マルスの歌」「黄金傳説」や「焼跡のイエス」という作品では、仏教のイメージではなく、ローマ神話の軍神マルス、中世ヨーロッパ Jacobus de Voragine が著作した「黄金伝説・La légende dorée」キリスト教聖人、それに新約聖書イエ

ス・キリストの話や暗示がそれぞれ導入され、作品の比喩となっていますので、各訳にそれを説明する読後解説文を足すことにしました。たとえば「黄金傳説」と「焼跡のイエス」の解説では、敗戦直後日本の奈落状態などを説明しておいてから、私は次の質問を読者に問い掛けています。作家は「赤ずくめの女」と「不良少年」を横浜桜木町と東京上野のヤミ市に「墮落」や「野生」の象徴として登場させているにもかかわらず、語り手の粉飾により、この一見芳しくない二人を焼跡の聖人・イエスに見立て、彼らを戦後の未来人間像・黄金伝説的な存在にまで昇格しているのです。一体なぜでしょうか。これはいうまでもなく石川淳と同時代無頼派作家として知られている坂口安吾の「生きよ、落ちよ」との主張、戦後まもなく展開された「墮落論」につながりますが、余りにも有名な話で、ここでこれ以上は披露いたしません。しかし、なぜ私がこの突飛な質問を読者に投げ掛けるかと言いますと、それはこの二編の小説はよく風俗小説と見間違えられ、程度の低い次元で読まれがちで勿体なく思うからです。解説文を通じて作品のアレゴリー性について読者の注意を引き、形而上学的読みをしていただくことが大切です。

さて、翻訳に当たって解説文と平行して大事な二番目の strategy を申しますと、それは *style* の語調に特別な注意を払う事。英語で言いますと、*tone* の問題です。先に触れました通り、本の題目と内容にはっきりとしたズレが見られる場合、たとえ「普賢」と題されながら仏教小説ではない事、「黄金傳説」と名乗りながら、どこにも *Jacobus de Voragine* の原典の話に言及せずとの事、そこに作者より我々読者への大きな *wink* が示され、物語は決して額面通りに捉えるものではない、否、捉えてはいけないという手掛かりや示唆がちりばめられているように私は思うのです。勿論解説文で作品を分析し行間のいくつかの *clue* とその読みを立証する事は可能ですが、文体に漂う雰囲気や英文に再現するのは、我ながら一方ならぬ作業でした。それは先ず石川淳が好んで使う複合動詞——その例として「かきくどく」や「たたきだせる」が上げられるのですが——それに含蓄されている二重の意味を訳して、またその警句らしいところをほめかすことが要求されます。『普賢』に出てくる「綿々とかきくどかう」に *to write at length* と *to woo at length* というシャレめいたくだりはありますが、あいにくこの重複された意味をぴったり持ち合わせている一つの英語複合動詞はありませんし、また「黄金傳説」中の「たたきだす」にも穀物をたたきだす (*to winnow*) という意味合いも人をたたきだす (*to cast out*,

to ostracize) という意味も含まれています。「To separate は両方を兼ねて間に合いそうですが、やはり帯に短し、襷に長し中途半端で物足りないのです。丁度都合のよい言葉は運よくあたるものではなく、この場合はどうしても文章が幾分か長くなりますが、二通りの意味を表わす二つの語句で、両義を同文章で表現し、英文を太らせることにする他は仕方ありません。text への介入を極力避けたい minimalist 翻訳者はこの小太りや敷衍を好まないと思いますが、散文作品は詩歌よりもある程度自由を許すもので、しかも饒舌体で書かれた初期の石川淳作品を翻訳するに際して文を肥らせることは持って来いの解決策の一つです。一語一文を case by case で原文を解読していく作業で deconstruction 論で言うように text を unpack して読む事ですが、すべては肥らすがいととも言えませんが、圧縮やその他の方法もいくつもあり、役に立ちます。ご参考のため、上の二つの例文、それに駄洒落の取り扱いの文をここに記しておきます。例えば、第一例文に見る如く、ここでイタリック体で示す複合動詞の部分だけではなく、サンスクリット用語を入れるまで仏教における結縁灌頂儀式などの説明も文体に含まされ、英文全体が肥らされています。「嘘」や「痴情」というキー・ワードも tissue of lies とか fabrication といった重複になる「繰り返し文」で誇張されて、その上、この小説の

基本構造を貫く肝心な「透き写し」概念を読者に明確にするため、*"a palimpsest of my own devising"*という言葉を取って加えている事にもご注意ください。賛否両論あると思いますが、このように密度の高い饒舌体を訳するにあたって、以下は私が試みた方法によるものです。この方法を英語で *amplification* と私は言っていますが、敷衍か増幅か、つまり *text* の意味とニュアンスを最大限に聞かすというステレオ音響効果と申しましょうか。

例文一・「そもそもわたしが心にもなく歴史の反故の中からクリスティヌ・ド・ピザンのやうな皺深き老女の残骸をペン先にからげてみたのはジャンヌ・ダルクに引懸りをつけよう魂膽であり、そのジャンヌ・ダルクとの結縁といふのがじつは嘘のかたまりで、十年以來夢うつつに心を悩ませるユカリの面影をこの遠き世の少女に透き寫して彩色おぼつかぬ繪姿を前に綿綿とかきくどかうとした痴情の沙汰にはかならず、それとても……」

『石川淳全集』第一巻筑摩書房一九八九年『普賢』より pp.415-416.

Now, as never before, let me be totally candid and tell you why I struck the tip of my

pen into the trash heap of history and used it like a hook to pick through the rubble and unearth the carcass of Christine de Pizan, to truss it up and tied together the loose ends of the life of this wrinkled old woman. It was because I was stirred by a secret plan, namely, that of finding a link, of detecting a trace of a connection, between the life of Christine's Joan of Arc and that of my Yukari. Alas, this karmic connection, this casting of a flower upon a mandala in an *abhiṣeka* ceremony designed to identify one's bodhisattva, has become a tissue of lies, a figment of my imagination, having neither truth nor fate to support its validity. This fabrication--a palimpsest of my own devising--was the product of a silly infatuation, of a heart haunted every minute, whether awake or asleep, for the last ten years by the vision of Yukari, of a tormented mind that sought through a process of superimposition to reshape her image into the likeness of the Maid of Orleans. Yet what I *produced in my endless tracings, in the prolix and petulant limning of my troth*, was but a pale imitation, a portrait of Yukari that bares little resemblance to Joan of Arc. What I have written in nothing more than the record of a lovesick idiot. ***The Bodhisattva***. Columbia University Press, 1990. pp. 118-119.

例文二・「…初穂を神に供へ來つたところの日本の米は神がかりがたき出されたあとでもなほ陰然として生活心理上の禁忌なのか、米でさへなければなにをあつかつても品物のよいのが大るばりだといふ女商人の良心の論理にちがひない。」

『石川淳全集』第二卷筑摩書房一九八九年「黄金傳説」より p. 325.

But for so long have the inhabitants of this island worshiped the god of rice and offered the firstfruits of every harvest at his altar that even now, when times have changed and his intermediary here on earth *has been separated like chaff from the grain and driven out as an imposter*, still nothing, but nothing, has been able to dislodge white rice from its time-honored position in the popular mind Indeed so dark and mysterious is its hold that to want something else is to violate an unspoken taboo Small wonder, then, that the heart and mind of this sensible businesswoman should be troubled at the thought of having stricken rice from the list of dishes she has to offer her customers. She knew she could brag all she wanted about white bread and black coffee but in the end, if she did not serve rice,

her words sounded like just so much hot air. Such was her logic. *The Legend of Gold & Other Stories*. University of Hawaii Press, 1998. pp. 56-57.

例文三・「……文藏が兩手をわたしの頸にかけて締めつけながら、
「きさまこそくたばれ。」締める手先になほも力をこめるのであつたが、あ
たかもこちらの頸のまはりに綿でも巻いてあるかのごとくすこしも壓迫が
感じられないのに、勢ひこんだ向うの手首をにぎってみると、元來骨太の
文藏の腕は抜けた齒のやうに頼りなく浮いてゐるばかり、これはいかに力
を入れようとしても力の入れ場がなくなつてしまつた腕なのかとわたしは
突然すべり落ちた興奮の隙間にぞつと冷え上つて、「どうした。おい、しつ
かりしろ。」と相手の肩をゆすると、文藏はこちらにのしかかつたままから
だをぴんと張つて、もう何を見ようもしない瞳をあらぬ方へ走らせ、ま
たもわけのわからぬ獨白に唇ををののかせてゐた……」

『石川淳全集』第一卷筑摩書房一九八九年『普賢』より p.375.

... putting his hands round my neck, [Bunzō] tried to strangle me. "You drop dead," he shouted, applying more and more pressure.

My neck seemed wrapped in cotton. I felt nothing. When I seized his wrists and pulled them away, his brawny arms flew back looking white and forlorn in the air *as freshly pulled teeth*. I realized that, no matter how much strength Bunzo might have once possessed, there no longer existed any task to *which he might indenture his hands*, and by putting them to work, *get a grip on life again*. I blanched, my being iced to the core.

"What's happened, Bun? Hey, pull yourself together," I said, shaking his shoulders.

His body, which had collapsed against mine, suddenly straightened upright, but his eyes stared vacantly ahead, seeing nothing. He continued to let his lips move, delivering their senseless monologue. *The Bodhisattva*. Columbia University Press, 1990. p. 68.

「力の入れ場／入れ歯」という洒落を訳文で完全に復元する事は無理でしょうが、

teeth, dentures, つまり義歯を思わせる indenture (齒型捺印、奉公に入れる)、それに grip といった言葉で原文の綾を出そうとしました。ついでに言いますが、『紫苑物語』の書き出し「国の守は狩りを好んだ。日の吉凶を撰ばず」で始まり、ドナルド・キーン先生がこれを“The governor of the province loved hunting. He did not care whether the day promised fair or foul”と大変面白く翻訳なされています。foul (凶、險悪、悪天候) と fowl (猟鳥、狩り羽) をかけて訳されて原文に存在しないものの、吉凶の訳として正しく、それに F の音が繰り返されている「国」「守」「狩り」「好む」の alliteration は英語で再現ができない代り、fair or foul を方便に原文の面白味を読者に伝える事に成功しているように私が評価したく、まさかここではどなたかが翻訳ルール違反として「ファウル」という事を言わないではないでしょうか。(笑)。

三つの例文を上にあげて主として言葉一つずつに取り組んでいくミクロ段階の翻訳処理の話になってしまったのですが、これから今日の話題として残るのは、もう一つの問題で、それは要するに作品全体のマクロ処理という事です。そもそも石川淳の文学の何が私を魅惑して引き付けたのかは、その自由の笑い、言葉の

綾に透き通って見える作家のほほえみで、それに文人作家が目指す反俗・反骨の高邁な知的な書き振りでした。この石川文学のエッセンスは評論家によって色々と定義されたり表現されたりしていますが、各作品に表れる、その洗練された雰囲気を一言で言い当てれば、それは「粋」という言葉で、また「粋」を石川淳に限定して英語に直して見たらば、それはEdo Coolという表現になるのではないでしょうか。エド・クール。いかがですか。ファッションショー用語みたいではあるが、的確です。なるほどエド・クール。名訳と言ってもよさそうです。そしてなぜ私がこんな遠慮なく手放しに褒めたたえるかと言いますと、それは私の訳ではなく、別の人が所有権を持つ発想です。羨ましい限りです。石川淳の文学に「cool」な様子は多分にあります。何があっても慌てふためく気配もなく、常にcoolに澄ましている構えがあるように思われます。只今神経が高ぶって声が半分上擦っている私がとても真似できないものです。批評家がよく指摘する石川淳の韜晦ぶりや文人肌、または新戯作者たるところはこのクールに相当する部分でありましょう。

しかし、クールだけでは石川文学のすべてを掴めたとはいえないのではないでしょうか。それと裏腹に存在する部分としてかなりhotな「生いき」もあるように思い、

訳にもそれを出さなければなりません。九鬼周造の『粹の構造』という理論を突然ここへ持ち込んできて皆さんにどう思われるか判りませんが、九鬼先生が定義するよう、やはり甘味と渋味を往き来するイキという感情や耽美観には感情や自己表現が抑圧され洗練された面があれば、同時に露骨発情の面もなきにしもあらず。私に言わせると、この「生意気」の tone や面付きを出すのは石川淳の翻訳の上、最も大事かつ困難なところで、作品をマクロ的に見て最も欠かせないものです。paragraph の分け方や言葉の選択である diction に殊更注意することも、技術的な段階での大きな秘訣ですが、何しろ翻訳者も一旦額面どおりに訳したくだりに戻って、自分までややマイキな気分になりながら、相対性に満ちるその tone をひき出すことがコツだと思えます。私が言わんとしている事は間違って「脚色」や「書き換え」という風に見受けられ叱りを受ける恐れも十分にある、甚だ誤解をまねきやすい発言と承知の上、それでも翻訳者はカンと解釈に頼って text を自由にほぐしていく冒険を犯さずには石川淳の翻訳操作は不可能ではないかと私が考えるのです。だからこそ石川淳は難しいと言えましょう。

カンというものはあるようでない、ないようであるところに働くものですが、

たとえば『普賢』を訳するに当たって「透き写し」「上塗り」「見立て」「写し絵」や「合わせ書こうとする」その一連の類似した言葉に特別注意を払い、それを *superimposition* や *layering* の文字通り訳をしたりした上、しかしそこに止まらず、敢えて *palimpsest* という難しい言葉まで訳文に導入したことはもう既に申しましたとおりです。この導入は結局私のカンによって決めたものですけれども、ありがたい事に、のちにカンの働きを裏付ける面白い発見をしました。つまり、石川淳が関東大震災からまもなくして取り組んだアンドレ・ジイドの『背徳者』の原文と訳文に次の興味深い言葉が出ます。

仏文・Et je comparais aux *palimpsestes*; je goûtais la joie du savant, qui, sous les écritures plus récentes, découvre sur un même papier un texte très ancien infiniment plus précieux.

和文・「わたしは自らを二重写本に比した。わたしは、同じ紙の上において後代の文字の下に、さらに限無く尊い太古の原文を発見した学者の悦びを味った。」

これは松本眞一郎氏の論文「石川淳と翻訳」（『早稲田文学』一九八九年七月号、pp.56-57）に紹介されている話ですが、『背徳者』主人公ミシエルにおいては違った意味でも、このパリンプセスト発見に私も悦びを覚えるのです。つまり、元々ギリシャ語に由来する、一般の読者が恐らく意味を知らないこの特殊、しかし至って便利な、「羊皮紙」は石川淳がちゃんと知っていて、この一旦書かれては消され、その上にまた書く「写本」や「写し本」とまで見事に和訳している事実もただ私のカンの働きではなく、証拠をもって立証できるものであります。例えばHDと名乗ったアメリカ作家 Hilda Doolittle (1886-1961) の Palimpsestes という小説に代表されるよう、二十世紀初頭モダニズム文学者の間に流行した言葉で、近頃、仏文学の権威 Gerard Genette のブルースト著『失われた時を求めて』に関する重層構造理論によって、少なくとも学者の間にも知られてきた言葉です。（Gerard Genette. *Palimpsestes: La littérature au second degré*. Paris: Éditions du Seuil, 1982 参照）。

最後になりましたが、暮れに出しました *The Legend of Gold* の序文の内容に少々触れて話を終わりにしたいと思い、そこで私のナマイキ論にもうちょっとはつきりした輪郭が具わるのではないかと考えます。序文で訴えているように石川先生

の文学に高尚な芸術性があると同時に政治性もかなり高く、今回の翻訳・出版にあたりどちらかと言えば、政治性の方を浮き彫りにして読者の目をそれに引こうと努力しました。政治性を重視するのは何も私が初めてではないのですが、しかし従来の研究者は主としてこの五つの作品に読み取れる、煙にまく石川先生の輓晦ぶりを評価してきました。一方、私は作家のナマイキな声に読者の耳を傾けさせるために語り手の無遠慮な *outspokenness* に注意するよう、序文や解説文で呼び掛けております。近頃婉曲的にいわれている「歴史の問題」の真ッ只中に生き、書き続けた石川淳の強靱な声がこの五つの小説を貫き、十五年戦争、大陸侵略、敗戦、終戦直後一般に行なわれた戦争責任・罪の概念、占領期改革逆戻り方針、平和条約締結後のピースのあり方などについて憚らずして、多岐に渡り当時もつとも真剣で生々しい政治や社会問題に関する発言が文脈に織り込まれています。たとえば「マルスの歌」で戦争と権力に NO! と「やめろ。」と叫ぶ声があれば、「黄金傳説」と「焼跡のイエス」に廃墟の中より聖人や救い主として誰が生まれるのかが問われたり、また『鷹』には「万人の幸福」のための「ピース」への願望が描かれたりしています。ここでそれぞれの内容を列挙はしませんが、この作品は抵抗者として戦争とその後始末を直接経験した人間の記録として貴重であり、

その時代を理解する上にも価値ある証言として、是非お薦め致します。海外の読者にも戦時中いわゆるフランスでいうようなレジスタンスは日本になくても、永井荷風、金子光晴、蔵原惟人、宮本百合子、桐生悠々、杉原千畝等といった著名な人々が居て、一億一心や一億総懺悔で代表される日本文化の同質・統一行動はすべてではなかった事を知るのも大切。そろそろ従来の歴史観を洗い直し、今まで「例外」や「日本人離れ」と片付けられがちであったこれらの人々を異端者どころか逸早く二十一世紀を見通した先見の明に満ちた存在として見るのも良いではないでしょうか。

発表を終えて

博士論文に翻訳二冊と石川淳研究の経過が発表文に書いてありますが、しかし目下没頭中の『日本散文学モダニズム・アンソロジー』に言及せず話が終わってしまい、これを機会にこの仕事を簡単に紹介させていただきます。2、3年前オハイオ州立大学院生と組み、昭和10年代文芸復興期代表作品を読み、既に知られている新感覚派作品よりも海外で無名に近い新興芸術派や『新青年』掲載の名作を皆でぼつぼつ英訳し、アンソロジー企画を開始しました。いよいよ昨年9月、日文研のおかげで、本格的にプロジェクトに取組む事が出来、院生草稿編集の他、私の寄稿として先ず昭和11年橋外男著「酒場ルーレット紛擾記」、それに昭和9年出版舟橋聖一著「ダイヴィング」を手懸け、この頃はようやく仕上げの段階まで漕ぎ着けたところ。両方とも英タイプ文にして70頁位の中編もので、『酒場ルーレット』は一種の喜劇で、英文で冗談が不発にならないように気を付け、『ダイヴィング』の文章は粗っぽいと一部に言われるが、後半が特に叙情性に富み、その美しさを出さなければなりません。久しぶりに石川淳と違った作家による作品を試みることになりました。院生寄稿として稲垣足穂著「星を売る店」と「RちゃんとSの話」、阿部知二著「シネマの黒人」と「日獨對抗競技」、梶井基次郎著「Kの昇天」と「ある崖上の感情」、牧逸馬著「上海された男」等あり、吉行エイスケ、牧野信一、尾崎翠、夢野久作、江戸川乱歩の短編が抜粋も含む予定です。

発表中、石川先生の文体が同年輩川端先生より困難だと敢えてナマイキに言いましたところ、聴衆者一人が口をすぼめていささか驚いたか疑問符のような顔を見せましたが、質疑応答の時、いくつか熱心な質問の内、結局私の誇張に対しては反論は出ませんでした。バカ翻訳者につける妙薬は無しと思われたかも知れませんが、恐らく『雪国』や『美しさと哀しみと』に代表され、神話化とまでなっている「日本的な」難しさを指摘したかったのでしょうか。しかし一体「日本的」が何であるか、しかも日本的表現には必ず読解困難が生ずるかしないかを改めて考える必要はあるように思います。日本にはいくつかの日本もある、これは石川淳の研究を通じて私が学んだことの一つです。

無論どんな作家や作品もそれなりの挑戦が要求され、その苦勞に頭を悩ます翻訳者を軽視するつもりは微塵もありません。と言っても余りに総花的になり、どこもそれなりに難しいと言ってしまうのも無意味に感じます。饒舌体の有無で石川淳の作品でさえ難易の差もあるからです。とにかくにも訳を仕上げるには、常に原文と照らし合わせてチェックしていく事と、下書きを重ねながら原稿を寝かせては直す、寝かせては直す事が一番大切ではないでしょうか。

Jan. 1. 1966

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORIβEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡—」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋ー都市社会の自由とその限界ー」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性ー猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りにー」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通して見た日米社会構造の比較」

⑮	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑯	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑰	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
⑱	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
⑳	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉑	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉒	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リーハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのペーバルス王伝説における主従関係の比較」
②⑧	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②⑨	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
③①	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
③③	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラーल・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロブ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④⑤	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 客員助教授) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13 (1992)	李 栄九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国・ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考 -『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④⑧	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスト (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 ー技術移転をめぐるー」
④⑨	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国・プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間ー北條政子と宗教」

⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国・プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854～1919) とフリーア美術館 ー米国の日本美術コレクションの一例としてー」
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・日文研来訪研究員) KIM Choon Mie 「日本近代知識人の思想と実践ー有島武郎の場合ー」
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 ー旧身分文化との関連を中心としてー」
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択：10世紀の日本と朝鮮 ー科举制度をめぐるー」
⑤5	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り ー平安朝文学の特質ー」
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・ カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDEWALLE 「日本・ベルギー文化交流史 -南蛮美術から洋学まで-
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と偽作 -井上靖文学における『陰謀』-
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 -俳句の可能性を中心に-
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥3	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880~1930」
64	6. 5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウォ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.10 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験-文学における日本人と上海」
66	6. 7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見-王朝文を中心に-

67	6. 9.13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) Franeois MACÉ 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
⑥8	6.11.15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6.12.20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
⑦0	7. 1.10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心－」
⑦1	7. 2.14 (1995)	嚴 紹璽 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのかかわり－」
⑦2	7. 3.14 (1995)	王 家驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦3	7. 4.11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜－旋律型を中心－」

⑦4	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源－神話と歴史－」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち」
76	7. 7.25 (1995)	崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sug 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑦7	7. 9.26 (1995)	蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) SU Dechang 「日中の敬語表現」
⑦8	7.10.17 (1995)	李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「一日・中比較文化考－雷神思想の源流と展開」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑧0	7.12.19 (1995)	タチヤーナ L. ソコロワ＝デリュージナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性－西欧の俳句についての一考察－」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

⑧2	8. 2.13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12 (1996)	イザベル・シャリエ (神戸大学国際文化学部外国人教師) Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立 - 近代批評における新語 -」
⑧4	8. 4.16 (1996)	リース・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧5	8. 5.28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) Mark Cody POULTON 「能における『草木成仏』の意味」
⑧6	8. 6.11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30 (1996)	シルヴァン・ギニヤール (大阪学院大学助教授) Sylvain GUIGNARD 「筑前琵琶 - 文化を語る楽器」
88	8. 9.10 (1996)	ハーバート E. プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
⑧9	8.10. 1 (1996)	王 秀文 (中国・東北民族学院助教授・日文研客員助教授) WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 - 日本におけるシャクシにまつわる民間信仰 -」

90	8.11.26 (1996)	王 宝平 (中国・杭州大学日本文化研究所副所長・ 日文研客員助教授) WANG Bao Ping 「明治前期に來日した中国人の外交官たちと日本」
91	8.12.17 (1996)	陳 生保 (中国・上海外国語大学教授・日文研客員教授) CHEN Shen Bao 「中国語の中の日本語」
92	9.1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシェリャコフ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪 研究員) Alexander N. MESHCHERYAKOV 「奈良時代の文化と情報」
93	9.2.18 (1997)	郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) KWAK Young-Cheol 「言語から見た日本」
94	9.3.18 (1997)	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル (スペイン・マドリード 国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL 「弁当と日本文化」
95	9.4.15 (1997)	ミケーレ・マルラ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校 準教授・日文研客員助教授) Michele F. MARRA 「弱き思惟 - 解釈学の未来を見ながら」
96	9.5.13 (1997)	デニス・ヒロタ (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 バークレー仏教研究所準教授) Dennis HIROTA 「日本浄土思想と言葉 - なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
97	9.6.10 (1997)	ヤン・シコラ (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) Jan SYKORA 「近世商人の世界 - 三井高房『町人考見録』を中心に -」

98	9. 7. 8 (1997)	鶴田 欣也 (カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・ 日文研客員教授) Kinya TSURUTA 「向こう側の文学ー近代からの再生ー」
⑨9	9. 9. 9 (1997)	ポーリン・ケント (龍谷大学助教授) Pauline KENT 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14 (1997)	セオドア・ウィリアム・グーセン (カナダ・ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) Theodore William GOOSSEN 「『日本文学』とは何かー21世紀に向かって」
⑩1	9.11.11 (1997)	金 禹昌 KIM Uchang (韓国・高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) リヴィア・モネ Livia MONNET (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) カール・モスク Carl MOSK (カナダ・ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン・シコラ Jan SYKORA (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) 鶴田 欣也 Kinya TSURUTA (カナダ・ブリティッシュ コロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人ー外からのまなざし」
102	9.12. 9 (1997)	ジョナ・サルズ (龍谷大学助教授) Jonah SALZ 「猿から尼までー狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	姜 信杓 (韓国・仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員 教授) KANG Shin-pyo 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」

104	10. 2.10 (1998)	高 文漢 (中国・山東大学教授・日文研客員教授) GAO Wenhan 「中世禅林の異端者——休宗純とその文学」
105	10. 3. 3 (1998)	シュテファン・カイザー (筑波大学教授) Stefan KAISER 「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7 (1998)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学教授・日文研客員教授) Sumie A. JONES 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19 (1998)	リヴィア・モネ (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) Livia MONNET 「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画的身体」
108	10. 6. 9 (1998)	島崎 博 (カナダ・レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) Hiroshi SHIMAZAKI 「化粧の文化地理」
109	10. 7.14 (1998)	丘 培培 (米国・バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) Peipei QIU 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか — 詩的イメージとしての典故 —」
110	10. 9. 8 (1998)	ブルーノ・リーネル (スイス・チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日 文研客員助教授) Bruno RHYNER 「日本の教育がかかえる問題点」

⑪⑪	10.10. 6 (1998)	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ (エジプト・カイロ大学講師・日文研客員助教授) Ahmed M. F. MOSTAFA 『『愛玩』－安岡章太郎の『戦後』のはじまり』
⑪⑫	10.11.10 (1998)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison McQUEEN-TOKITA 『『道行き』と日本文化－芸能を中心に』
113	10.12. 8 (1998)	グレン・フック (英国・シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) Grenn HOOK 『地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割』
⑪⑭	11. 1.12 (1999)	杜 勤 (中国・華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) DU Qin 『『中』のシンボリズムについて－宇宙論からのアプローチ』
115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス (米国・ボストン大学助教授・日文研客員助教授) Sheila SMITH 『日本の民主主義－沖縄からの挑戦』
⑪⑯	11. 3.16 (1999)	エドウィン A. クランストン (米国・ハーバード大学教授・日文研客員教授) Edwin A. CRANSTON 『うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化?』
⑪⑰	11. 4.13 (1999)	ウィリアム J. タイラー (米国・オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) William J. TYLER 『石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について』

118	11. 5.11 (1999)	金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) KIM Ji Kyun 「内藤湖南先生の眞蹟－高麗太祖顕陵詩」
119	11. 6. 8 (1999)	マリア・ヴォイヴォディッチ (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) Marija VOJVODIC 「言葉いろいろ－日本の言葉に反映された文化の特徴－」
①20	11. 7.13 (1999)	リース・幸子 滝 (ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコンサル タント・日文研客員助教授) REECE Sachiko Taki 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴 力」
121	11. 9. 7 (1999)	宋 敏 (国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) SONG Min 「明治初期における朝鮮通信使の日本見聞」
122	11.10.12 (1999)	ジャン ノエル ロベール (国立高等研究院国民大学校文化大学学長・日文研客員 教授) Jean-Noël A. ROBERT 「二十一世紀の漢文-死語の将来-」

○は報告書既刊

なお、報告書はホームページのデータベースで見ることが出来ます。

発行日 2000年3月1日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048
ホームページ: <http://www.nichibun.ac.jp/>
問合先 国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

© 2000 国際日本文化研究センター

■ 日時

1999年 4 月13日(火)

午後2時 ～ 4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

